

高等学校日语专业教材系列

日本短篇小说 作品选读

吴鲁鄂 主编



WUHAN UNIVERSITY PRESS

武汉大学出版社

日本短篇小说作品选读

主 编 吴鲁鄂
编 写 吴鲁鄂 盛莉



武汉大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本短篇小说作品选读/吴鲁鄂主编. —武汉: 武汉大学出版社, 2009. 3

高等学校日语专业教材系列

ISBN 978-7-307-06817-9

I. 日… II. 吴… III. ①日语—阅读教学—高等学校—教材 ②短篇小说—作品集—日本 IV. H369.4:I

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2009)第 006134 号

责任编辑:王春阁 责任校对:刘欣 版式设计:支笛

出版发行: 武汉大学出版社 (430072 武昌 珞珈山)

(电子邮件: cbs22@whu.edu.cn 网址: www.wdp.com.cn)

印刷: 武汉中科兴业印务有限公司

开本: 720 × 1000 1/16 印张: 22.75 字数: 413 千字

版次: 2009 年 3 月第 1 版 2009 年 3 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-307-06817-9/H · 627 定价: 32.00 元

版权所有, 不得翻印; 凡购我社的图书, 如有缺页、倒页、脱页等质量问题, 请与当地图书销售部门联系调换。

前言

短篇小说泛指小说中篇幅较短的一种小说形式，字数虽无明确限制，但与长篇小说差异绝非仅字数而言。短篇小说以“单一集中的效果，强烈统一的印象”为特征，要求题材超常特异、主题恒久锐敏。一般短篇小说话题切入方式都很巧妙，往往采取截取生活中某一紧迫事件的横断面，捕捉一个极易被忽视、非常识所能认知的人性表象的方式展开描述。它短小精悍，反应迅速敏捷，一个好的短篇正如鲁迅所说的那样，“借一斑略知全貌，以一目尽传精神”，足以与洋洋数十万言的长篇大作相媲美，同样可以塑造令人难忘的艺术形象，揭示社会值得关注的重大问题。

日本近现代文学作品有“短篇小说宝库”之誉，许多著名作家都以短篇小说见长。我们知道，以他的名字命名日本文学最高奖“芥川文学奖”的著名作家芥川龙之介终生致力于短篇小说的创作和理论探讨，没有写过一部长篇；誉为“小说之神”的志贺直哉长达五六十年的创作生涯中仅仅只有一部长篇作品《暗夜行路》问世，而且，这部作品是由许多短篇集结而成的，算不上真正意义上的长篇。日本许多著名长篇，如：世界上称为“小说之祖”的《源氏物语》、日本近代文学巨匠夏目漱石的《我是猫》、唯美主义代表作家谷崎润一郎的《细雪》等在结构上均可见类似现象，这些作品都有一个共性，即：由一个个珍珠般的小短篇横向并列式组成。日本文学研究大家吉田精一、评论家山本健吉曾在他们主编的《新编文学史》（日本角川书店昭和61年出版）的日本文学综述中将这种“短篇性”的文学作品概括为整个日本文学的特征。当然，这种现象的出现与近代小说这种文学形式得以广泛流行的近代初始，作品一般都只能在同人期刊、报纸文艺栏上发表，很大程度上与受篇幅限制有关。另外，就国民性而言，对不太擅长抽象思辨和长远宏大规划、喜好在切合实际的、具体的、非体系的、充满感情的、人生的某一个特殊地方运用语言的日本人来说，如同他们喜欢短歌、俳句等短诗、青睐独立场景的画卷、擅长片格组成的漫画一样，短篇小说是最适合表述情感的形式。

日本近现代文学家中最早发现短篇小说这种文学形式，并着手实验性地进行写作手法尝试的是明治时代的文学巨匠森鸥外。大正时代，经过菊池宽、芥

川龙之介等人的努力，完成了文学的古典形式写作手法。进入昭和时代后，涌现出梶井基次郎、川端康成等许多短篇小说的写作高手。他们的作品看起来都是一些非常琐碎的日常小事的罗列，但独特的视角、敏锐的感性、深刻的诠释、深层次的心理剖析，将主人公在现实与非现实夹缝中痛苦挣扎的艰辛历程表述得淋漓尽致，深受读者喜爱。日本战败后，又有石川淳、梅崎春生等娴熟的写作高手加入创作行列，一篇篇带有强烈时代批判意识、极具象征性的名篇装点了时代文坛。而且在创作手法上形成了一个共识，即：简洁明快的语气、严密紧凑的结构、回味无穷的主题、印象深刻的归纳。后来被称之为短篇小说名篇的无一不具备这些条件。但是，20 世纪，当我们进入卫星电视转播时代，世界产生共时性、形成世界一体化，短篇小说的形式也随之发生了巨大变化。许多短篇小说打破传统创作模式，故事的内容、主题、传递结构、时空定位上都与以往的作品产生明显差异，甚至出现一些根本不具备主题、结构散乱、时序颠倒的作品，却颇受欢迎，屡获大奖。当然，这并不意味着短篇小说创作手法的走样或是衰退，应该说，是顺应国际化、多元化时代发展和现实的需要，短篇小说的创作在不断地进行新的摸索和探寻。也许正因为有了这种变革，短篇小说又将会给我们展示一个更加精彩的世界。

通过阅读日本短篇小说精品佳作，领略日本文学的纤细精美、感悟作者的思维走向、体会其中的深刻意境，无疑可以帮助我们在获得更高水准的日语阅读能力、提高文学分析鉴赏能力的同时，进一步了解日本人的思维方式、把握日本社会发展变化的脉络，从而开阔视野，从更深层次认知日本，认知世界。因此，作为大学日语专业文学课配套教材，我们从日本近现代文学这座“短篇小说的宝库”中精心挑选出各个时期最能反映时代变迁、社会动态、人的认知活动、最具代表性的 16 部作品提供给大家阅读欣赏。并对作家进行了综合性的介绍，在作品的赏析上也提出了一些仅供参考和借鉴的见解。

《日本短篇小说作品选读》适用于已具备日语中高级阅读能力的日本语言文学专业的大学本科、研究生作为教材或阅读资料选用。与此配套的还有本人主编的日本文学系列教材：《日本文学教程》、《日本近现代文学选读》《日本古典文学作品选读》（均已出版），基本上可以满足大学课堂教学的实施和科研的展开，也为广大的日语学习者，日本文学爱好者提高日语阅读能力、日本文学的修养提供了方便，对生活在现今社会的我们来说，是一个拓宽视野空间极好的窗口。

本教材出版发行之际，也是本日本文学系列教材完成之时，特别要提及的是此系列教材的策划者、武汉大学出版社编审王春阁老师，她除此以外，还策划完成了大学日语语言、文化系列教材，在此谨向她表示由衷的感谢。另外，

日语系硕士研究生韩露、程海英、周艳菲同学也做了部分工作，在此表示感谢。

由于本人能力有限，在认知水平和赏析能力上都还有很多不足，希望各位同仁、读者多多提出宝贵的意见，以便我们今后更好地完善这部教材。

主编 吴鲁鄂

2008年8月8日

目 录

前言.....	1
にごりえ.....	1
作家紹介	27
作品鑑賞	28
ゆあじゅうや 夢十夜	29
作家紹介	54
作品鑑賞	55
しせい 刺青	57
作家紹介	66
作品鑑賞	67
こぞう かみさま 小僧の神様.....	68
作家紹介	79
作品鑑賞	80
たかせぶね 高瀬舟	82
作家紹介	93
作品鑑賞	95
やぶ なか 藪の中	96
作家紹介.....	108

2 | 日本短篇小说作品选读

作品鑑賞	110
しモン 檸檬	112
作家紹介	119
作品鑑賞	120
セメント樽の中の手紙 たる なか てがみ	122
作家紹介	126
作品鑑賞	127
あらの 曠野	129
作家紹介	144
作品鑑賞	145
ヴィヨンの妻 つま	147
作家紹介	176
作品鑑賞	177
桜の森の満開の下 まんかい	178
作家紹介	203
作品鑑賞	204
はし 橋づくし	206
作家紹介	225
作品鑑賞	226
し 死	228
作者紹介	252
作品鑑賞	253
ニュージーランド	255
作者紹介	283

作品鑑賞.....	284
よづ 夜釣り.....	286
作家紹介.....	307
作品鑑賞.....	308
キッチン.....	310
作家紹介.....	348
作品鑑賞.....	349
参考书目.....	350

にぎりえ

ひぐちいちよう
樋口一葉


おい木村さん^{しん}信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いでは
 ないか、又素通りで二葉^{ふたば}やへ行く氣だらう、押かけて行つて引ずつて来る
 からさう思ひな、ほんとにお湯^{ふう}なら歸りに屹^{きつと}度よつてお呉れよ、噓つ吐き
 だから何を言ふか知れやしないと店先に立つて馴染らしき突かけ下駄の男を
 とらへて小言をいふやうな物の言ひぶり、腹も立たずか言譯しながら^{のち}後刻に
 後刻にと行過るあとを、一寸舌打しながら見送つて後にも無いもんだ来る氣

もない癖に、本當に女房もちに成つては仕方がないねと店に向つて^{しきみ} 闘をまたぎながら一人言をいへば、高ちやん大分御述べだね、何もそんなに案じるにも及ぶまい^{やけぼつくひ} 焼棒杭と何とやら、又よりの戻る事もあるよ、心配しないで^{まじなひ} 呪でもして待つが宜いさと慰めるやうな朋輩の口振、力ちやんと違つて私しには^{うで} 技倆が無いからね、一人でも逃しては残念さ、私しのやうな運の悪るい者には呪も何も聞きはしない、今夜も又木戸番か何たら事だ面白くもないと肝癪まぎれに店^{みせさき} 前へ腰をかけて駒下駄のうしろでとんへと土間を蹴るは二十の上を七つか十か引^{ひきまゆげ} 眉毛に作り生際、白粉べつたりとつけて唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅も厭やらしき物なり、お力と呼ばれたるは中肉の背恰好すらりつとして洗ひ髪の大嶋田に新わらのさわやかさ、^{あり} 頸もと計の白粉も榮えなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて、烟草すばへ長烟管に立膝の無作法さも咎める人のなきこそよけれ、思ひ切つたる^{おほかた} 大形の裕衣に引かけ帯は黒緇子と何やらのまがひ物、緋の平ぐけが背の處に見えて言はずと知れし此あたりの姉さま風なり、お高といへるは洋銀の^{かんざし} 簪で天神がへしの鬘の下を搔きながら思ひ出したやうに力ちやん先^{さつき} 刻の手紙お出しかといふ、はあと氣のない返事をして、どうで來るのでは無いけれど、あれもお愛想さと笑つて居るに、大底におしよ卷紙^{ひろ} 二尋も書いて二枚切手の大封じがお愛想で出来る物かな、そして彼の人^{から} は赤坂以來の馴染ではないか、少しやそつとの^{いざ} 紛雜があろうとも縁切れになつて溜る物か、お前の出かた一つで何うでもなるに、ちつとは精を出して取止めるやうに心がけたら宜かる、あんまり冥利がよくあるまいと言へば御親切に有がたう、御異見は承り置まして私はどうも彼んな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやうにいへば、あきれたもののだのと笑つてお前なぞは其我まゝが通るから豪勢さ、此身になつては仕方がないと

うち^{うちは}は團扇を取つて足元をあふぎながら、昔しは花よの言ひなし可笑しく、表を通る男を見かけて寄つてお出でと夕ぐれの店先にぎはひぬ。

店は二間間口の二階作り、軒には御神燈さげて盛り鹽景氣よく、空壇か何か知らず、銘酒あまた棚の上にならべて帳場めきたる處も見ゆ、勝手元には七輪^{あふ}を煽ぐ音折々に騒がしく、女^{あるじ}主が手づから寄せ鍋茶碗むし位はなるも^{ことわり}道理、表にかゝげし看板を見れば子細らしく御料理とぞしたゝめける、さりとて仕出し頼みに行たらば何とかいふらん、俄に今日品切れもをかしかるべく、女ならぬお客様は手前店へお出かけを願ひますとも言ふにかたからん、世は御方便や商賣がらを心得て口取り焼肴とあつらへに來る田舎ものもあらざりき、お力といふは此家の一枚看板、年は隨一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせを言ふやうにもなく我まゝ至極の身の振舞^{きりやう}、少し容^{つきあつ}貌^{ほか}の自慢かと思へば小面が憎くいと蔭口いふ朋輩もありけれど、交際^{つきあつ}ては存^{ほか}の外やさしい處があつて女ながらも離れともない心持がする、あゝ心とて仕方のないもの面ざしが何處となく冴へて見へるは彼の子の本性が現はれるのであらう、誰しも新開へ這入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、菊の井のお力か、お力の菊の井か、さても近來まれの拾ひもの、あの娘^このお蔭で新開の光りが添はつた、抱へ主は神棚へさゝげて置いても宜いとて軒並びの羨^{くさ}み種になりぬ。

お高^{ゆきゝ}は往來の人のなきを見て、力ちやんお前の事だから何があつたからとて氣にしても居まいけれど、私は身につまされて源さんの事が思はれる、夫は今の身分に落ふれては根つから宜いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年が違をが子があろがさ、ねへ左様ではないか、お内儀さんがあるといつて別れられる物かね、構ふ事はない呼出してお遣り、私しのなぞといつたら野郎が根から心替りがして顔を見てさへ逃げ出すのだから

仕方がない、どうで諦め物で別口へかゝるのだがお前のは其れとは違ふ、了簡一つでは今のお内儀さんに三^{みくだ}下り半をも遣られるのだけれど、お前は氣位が高いから源さんと一處^{ひとつ}にならうとは思ふまい、夫だもの猶の事呼ぶ分に子細があるものか、手紙をお書き今に三河やの御用聞きが来るだろうから彼の子僧に使ひやさんを為せるが宜い、何の人お嬢様ではあるまいし御遠慮ばかり^{まをし}申てなる物かな、お前は思ひ切りが宜すぎるからいけない兎も角手紙をやつて御覽、源さんも可愛さうだわなと言ひながらお力を見れば^{きせる}烟管掃除に餘念のなきか俯向たるまゝ物いはず。

やがて雁首を奇麗に拭いて一服すつてポンとはたき、又すいつけてお高に渡しながら氣をつけてお呉れ店先で言はれると人聞きが悪いではないか、菊の井のお力は土方の手傳ひを^{まぶ}情夫に持つなど、^{かんちが}考違へをされてもならない、夫は昔しの夢がたりさ、何の今は忘れて仕舞て源とも七とも思ひ出されぬ、もう其話しは止めへといひながら立あがる時表を通る兵兒帶の一むれ、これ石川さん村岡さんお力の店をお忘れなされたかと呼べば、いや相變らず豪傑の聲かゝり、素通りもなるまいとてずつと這入るに、忽ち廊下にはたへといふ足おと、姉さんお銚子と聲をかければ、お肴は何をと答ふ、^{さみ}三味の音^ね景氣よく聞えて亂舞の足音これよりぞ聞え^{そめ}初ぬ。

二

さる雨の日のつれべに表を通る山高帽子の三十男、あれなりと捉らずんば此降りに客の足とまるまじとお力かけ出して袂にすがり、何うでも遣りませぬと駄々をこねれば、容貌よき身の一徳、例になき子細らしきお客を呼入れて二階の六疊に三味線なしのしめやかなる物語、年を問はれて名を問はれて其次は親もとの調べ、士族かといへば夫れは言はれませぬといふ、平民かと

問へば何うござんしようかと答ふ、そんなら華族と笑ひながら聞くに、まあ左様おもふて居て下され、お華族の姫様ひいさまが手づからのお酌、かたじけなくお受けなされとて波々とつぐに、さりとは無作法な置つぎといふが有る物か、夫れは小笠原か、何流ぞといふに、お力流とて菊の井一家の左法、疊に酒のまする流氣もあれば、大平の蓋であほらする流氣もあり、いやなお人にはお酌をせぬといふが大詰めの極りでござんすとて臆したるさまもなきに、客はいよへ面白がりて履歴をはなして聞かせよ定めて凄ましい物語があるに相違なし、たゞの娘あがりとは思はれぬ何うだとあるに、御覽なさりませ未だ鬢の間に角も生へませず、其やうに甲羅は經ませぬとてころへと笑ふを、左様ぬけてはいけぬ、眞實の處を話して聞かせよ、素性が言へずば目的でもいへとて責める、むづかしうござんすね、いふたら貴君あなたびつくりなさりましよ天下を望む大伴おほともの黒主くろぬしとは私が事とていよへ笑ふに、これは何うもならぬ其やうに茶利ちやりばかり言はで少し眞實しんの處を聞かしてくれ、いかに朝夕を嘘の中にするからとてちつとは誠も交る筈、良人はあつたか、それとも親故かと眞に成つて聞かれるにお力かなしく成りて私だとして人間でござんすほどに少しは心にしみる事もあります、親は早くになくなつて今は眞實ほんの手と足ばかり、此様こんな者なれど女房に持たうといふて下さるも無いではなけれど未だ良人をば持ませぬ、何うで下品に育ちました身なれば此様な事して終るのでござんしよと投出したやうな詞に無量の感が溢れてあだなる姿の浮氣らしきに似ず一節さむろう様子のみゆるに、何も下品に育つたからとて良人の持てぬ事はあるまい、殊にお前のやうな別品さむではあり、一足とびに玉の輿にも乗れさうなもの、夫れとも其やうな奥様あつかひ虫が好かで矢張傳法肌の三尺帯が氣に入るかなと問へば、どうで其處らが落でござりましよ、此方で思ふやうなは先様が嫌なり、來いといつて下さるお人の氣に入る

もなし、浮氣のやうに思召ましようが其日送りでござんすといふ、いや左様
 は言はさぬ相手のない事はあるまい、今店先で誰れやらがよろしく言ふたと
 他の女が言傳たでは無いか、いづれ面白い事があらう何とだといふに、あゝ
 貴君もいたり穿索^{せんさく}なさります、馴染はざら一面、手紙のやりとりは反古の
 取かへつこ、書けと仰しやれば起證でも誓紙でもお好み次第さし上ませう、
 女夫^{めをと}やくそくなどと言つても此方^{こち}で破るよりは先方様の性根なし、主人も
 ちなら主人^{こは}が怕く親もちなら親の言ひなり、振向ひて見てくれねば此方も
 追ひかけて袖を捉らへるに及ばず、夫なら廢せとて夫れ限りに成ります、
 相手はいくらもあれども一生を頼む人が無いのでござんすとて寄る邊なげな
 る風情、もう此様な話しは廢しにして陽氣にお遊びなさりまし、私は何も沈
 んだ事は嫌ひ、さわいでさわいで騒ぎぬかうと思ひますとて手を扣いて
 朋輩を呼べば力ちやん大分おしめやかだねと三十女の厚化粧^{たう}が来るに、おい
 此娘の可愛い人は何といふ名だ^{だしぬけ}と突然に問はれて、はあ私はまだお名前を
 承りませんでしたといふ、嘘をいふと盆^{あん}が来るに焰魔^ま様へお参りが出来ま
 いぞと笑へば、夫れだ^{あん}とつて貴君今日お目にかゝつたばかりでは御坐りませ
 んか、今改めて伺ひに出やうとして居ましたといふ、夫れは何の事だ、貴君
 のお名をさと揚げられて、馬鹿馬鹿お力が怒るぞと大景氣、無駄ばなしの取
 りやりに調子づいて旦那のお商賣を當て見ませうかとお高がいふ、何分願ひ
 ますと手のひらを差出せば、いゑ夫には及びませぬ人相で見ますとて如何
 にも落つきたる顔つき、よせ〜じつと眺められて棚おろしでも始まつては
 溜らぬ、斯う見えても僕は官員だといふ、嘘を仰しやれ日曜のほかに遊んで
 あるく官員様があります物か、力ちやんまあ何でいらつしやらうといふ、化
 物ではいらつしやらないよと鼻の先で言つて分つた人^{はう}に御褒賞^{びやう}だと懷中か
 ら紙入れを出せば、お力笑ひながら高ちやん失禮をいつてはならない此お方

は御大身の御華族様おしのびあるきの御遊興さ、何の商賣などがおありなさ
 らう、そんなのでは無いと言ひながら蒲団の上に乗せて置きし紙入れを取あ
 げて、お相方^{あひかた}の高尾にこれをばお預けなされまし、みな^{みんな}の者に祝義でも遣
 はしませうとて答へも聞かずずん―と引出すを、客は柱に寄かゝつて眺め
 ながら小言もいはず、諸事おまかせ申すと寛大の人なり。

お高はあきれて力ちやん大底におしよといへども、何宜いのさ、これはお
 前にこれは姉さんに、大きいので帳場の拂ひを取つて残り^{みんな}は一同にやつても
 宜いと仰しやる、お禮を申て頂いてお出でと蒔散らせば、これを此娘の十八
 番に馴れたる事とて左のみは遠慮もいふては居ず、旦那よろしいのでござい
 ますかと駄目^{あり}を押して、有がたうござい^{あり}ますと搔きさらつて行くうしろ姿、
 十九にしては更けてるねと旦那どの笑ひ出すに、人の悪るい事を仰しやると
 てお力は起つて障子を明け、手摺りに寄つて頭痛をたゞくに、お前はどうす
 る金は欲しくないかと問はれて、私は別にほしい物がござんした、此品^{これ}さへ
 頂けば何よりと帶の間から客の名刺をとり出して頂くまねをすれば、何時の
 間に引出した、お取かへには寫眞をくれとねだる、此次の土曜日に來て下さ
 れば御一處にうつしませうとて歸りかゝる客を左のみは止めもせず、うしろ
 に廻りて羽織を着せながら、今日は失禮を致しました、亦のお出を待ますと
 いふ、おい程の宜い事をいふまいぞ、空誓文^{からせいもん}は御免だと笑ひながらさつ
 ―と立つて階段^{はしご}を下りるに、お力帽子を手にして後から追ひすがり、嘘か
 誠か九十九夜の辛棒をなさりませ、菊の井のお力は鑄型に入つた女でござん
 せぬ、又形^{なり}のかはる事もありますがといふ、旦那お歸りと聞て朋輩の女、
 帳場^{あるじ}の女主もかけ出して唯今は有がたうと同音の御禮、頼んで置いた車が來
 しとて此處からして乗り出せば、家中表へ送り出してお出を待ますの愛
 想、御祝義^{ひかり}の餘光としられて、後には力ちやん大明神様これにも有がたうの

御禮山々。

三

客は結城朝之助^{ゆふきとものすけ}とて、自ら道樂^{じつてい}ものとは名のれども實體なる處折々に見えて身は無職業妻子なし、遊ぶに屈強なる年頃なればにや是れを初めに一週には二三度の通ひ路、お力も何處となく懐かしく思ふかして三日見えねば文をやるほどの様子を、朋輩の女子ども岡焼ながら^{から}弄かひては、力ちやんお楽しみであらうね、男振はよし氣前はよし、今にあの方は出世をなさるに相違ない、其時はお前の事を奥様とでもいふのであらうに今つから少し氣をつけて足を出したり湯呑であほるだけは廢めにおし人からが悪いやねと言ふもあり、源さんが聞たら何うだらう氣違ひになるかも知れないとて^{ひやかす}冷評もあり、あゝ馬車にのつて來る時都合が悪いから道普請^{みちずけ}からして貰いたいね、こんな溝板のがたつく様な店先へ夫こそ人からが^{わる}悪くて横づけにもされないではないか、お前方も最う少しお^{ぎやうぎ}行儀を直してお給仕に出られるやう心がけてお呉れとずば――といふに、エ、憎くらしい其ものいひを少し直さずば奥様らしく聞へまい、結城さんが來たら思ふさまいふて、小言をいはせて見せようとて朝之助の顔を見るより此様な事を申て居まする、何うしても私共の手にのらぬやんちやなれば貴君から叱つて下され、第一湯呑みで呑むは毒でござりましよと告口するに、結城は眞面目になりてお力酒だけは少しひかへろとの嚴命、あゝ貴君のやうにもないお力が無理にも商賣して居られるは此力と思し召さぬか、私に酒氣が離れたら坐敷は^{さんまいだう}三味堂のやうに成りませう、ちつと察して下されといふに成程――とて結城は二言といはざりき。

或る夜の月に下坐敷へは何處やらの工場の一連^むれ、并たゝいて甚九かつぼれの大騒ぎに大方の女子は寄集まつて、例の二階の小坐敷には結城とお力の